

## 奄美群島における兼久式土器の基礎的研究（2）

鼎 丈太郎

### はじめに

近年、小湊フワガネク遺跡群（名瀬市教育委員会 2005）、マツノト遺跡（笠利町教育委員会 2006）と兼久式土器の良好な資料を出土した遺跡の報告が相次いで報告され、これまで判然としなかった奄美群島<sup>1)</sup>の古代史の実体が明らかにされつつある。当該時期の奄美群島は、ヤコウガイの大量集積、貝匙製作、鉄器の使用、ヤコウガイ交易や階層のある社会の可能性など、奄美群島の古代史を大きく塗り替える可能性を持っている。

兼久式土器は、奄美群島特有の在地土器であり、ヤコウガイ大量出土遺跡（ヤコウガイを集積している遺跡）において出土している土器もその殆どが兼久式土器である。しかし、これらの遺跡がヤコウガイ大量出土遺跡として脚光を浴びている一面、兼久式土器研究は未だ混迷しており、一番広い時間幅では弥生～平安時代という時間幅で捉えられているのが現状である。

これまでの兼久式土器研究は、それぞれの遺跡で出土した兼久式土器のみを対象としたものが多く、遺跡間での相対的な兼久式土器研究は殆ど行われていない。よって、同じ兼久式土器であっても分類や編年の細分化が進んでおらず、全体としては判然としない状況に陥っていた。

そこで、平成 13 年（2001）に修士論文をまとめる際に、小湊フワガネク遺跡群の資料を整理する機会を得、小湊フワガネク遺跡群の兼久式土器を中心に、兼久式土器の実態解明及び編年研究の基礎的作業として使用可能な分類案の作成を行なった。しかし、分類案の作成と大凡の土器変化は推測したが、編年作業まではいたらなかった（鼎 2001）<sup>2)</sup>。

その後の兼久式土器研究は、小湊フワガネク遺跡群、マツノト遺跡と重要な遺跡の正式報告がなされ、その他優れた研究・分類・編年が次々と発表され成果をあげている。

そこで、本稿では 2000 年以降の研究略史をまとめ、2001 年に小湊フワガネク遺跡群遺跡の兼久式土器を中心にまとめた分類案を再度検討したい。

## 第一章 問題の所在

### 1 兼久式土器の定義

兼久式土器の名称は、1974 年に河口貞徳氏が奄美群島出土土器の形式設定を行う際に、伊仙町面縄第三貝塚（当時兼久貝塚）から発見された出土土器を標識として設定し「兼久式土器」と名付けたのが始まりで、その名称は今日まで使用されている（河口 1974）。

兼久式土器自体の発見は、名称設定以前の 1930 年に広瀬祐良氏・小原一夫氏が徳之島の伊仙町にある面縄第一貝塚を調査した際に出土しているのが初見である（中山 1994）。また、中山清美氏が『奄美、沖縄においても「かねく」とは砂地のことを「かねく」と呼んでおり、兼久式土器がほとんどこ

れら砂丘地から出土している』(中山 1988b)と指摘している通り、兼久(かねく)式土器とは地元の人にとって出土地が容易に想像できる名称でもある。河口氏は兼久式土器の年代を「石斧を伴わないこと」、「弥生式土器の終末期の笹貫遺跡の土器の影響で底部に木葉圧痕をもつこと」を理由に兼久式土器に対し、弥生時代後期の年代を推定されている。河口氏は、兼久式土器に類似する沖縄県出土土器との比較の際、兼久式土器の特徴として「平底の底部に木葉圧痕があり、頸部に絡縄凸帯をめぐらせる(縦位方向の凸帯あり)。沈線文は鋸歯文を基本とし、直線的である。口唇部に刻目を施す。単独遺跡を形成する」と提示している。この河口氏の論文で初めて兼久式土器との名称が示され、兼久式土器の特徴や年代がおおまかながら定義付が行われた(河口 1974)。

その後、発掘調査において、河口が設定した兼久式土器の定義に合致しない新資料が発見された。それらの資料の取扱いをどのように行うかは、各研究者により様々である。このままでは、兼久式土器の分類を行う事は出来ない。そこで、兼久式土器の基礎的研究を目的としている本稿では、兼久式土器の定義を河口定義の木葉痕を重視し、底部外面に木葉痕を有する土器群として仮に定義したい。この定義は、大西氏も同様の定義を行っている(大西 1997)。

## 2 研究略史

兼久式土器は、奄美大島を中心とする奄美群島に広く分布している土器である。多くは砂丘遺跡から出土しており、器形は甕形土器と壺形土器で構成されている。底部に木葉圧痕を有する事が一番の特徴だが、未だに判然としない部分が多い土器である。そこで、本章では兼久式土器の先行研究を整理しながら兼久式土器が抱える諸問題点を明らかにし、特に解決すべき問題の抽出を行いたい。

また、2000年までの先行研究は、奄美における兼久式土器の基礎的研究(鼎 2001)において整理してある為、今回は2000年以降に報告された兼久式土器研究の研究略史をまとめた。

### (1) 2000年以降の兼久式土器研究

●2000年、高梨修は1995(平成7)年1月22日に開催された『シンポジウムよみがえる古代の奄美』において発表した「マツノト遺跡出土の土器と編年」の「報告」と「討論」の部分を一部の語句表記を変更し、『奄美博物館研究紀要』第5号に「いわゆる兼久式土器と土盛マツノト遺跡出土土器の比較検討」と題して発表した。マツノト遺跡出土兼久式土器を3類に分類し、共伴遺物より年代の設定もおこなっている。内容は、『シンポジウムよみがえる古代の奄美』(高梨 1995)と同じである(高梨 2000b)。

●2004年、高梨修は『考古資料大観』にて「奄美諸島の土器」を発表した(高梨 2004)。この論文は、兼久式土器のみでなく、いわゆる「貝塚時代後期」の奄美群島の土器を日本列島の時代区分に対比させ変遷を行っている。兼久式土器については「古墳時代後期～平安時代伴行期」段階の土器として概略説明を行っており、小湊フワガネク遺跡群出土甕形土器資料を中心に5段階の文様変化を提示、共伴遺物より6～10世紀の年代設定を行っている。また、小湊フワガネク遺跡群の発掘調査成果より兼久式土器をスセン当式土器に後続する土器として設定しており、弥生土器から兼久式土器への推移を否定している(高梨 2004)。

①沈線文だけで装飾された土器(口唇部に刻目が施されているものが多く認められる)

②刻目隆帯の上下に沈線文が施された一群

③刻目隆帯の上側だけに沈線文が施された一群

④刻目隆帯のみが付された一群

⑤刻目隆帯が付される位置が胴部中位に下がり、隆帯に施される刻目はまばらになり、隆帯が全周しないであらけていく一群

以上の5段階の文様変化をあげ、帰属年代を共伴遺物より上限6～7世紀ごろ、下限を10世紀としている。奄美諸島における在土器変遷図では、土器の変遷を図示しており各分類の大凡の帰属年代が推定できるが、上記の5段階の各分類に具体的な年代は設定していない。

●2005年、名瀬市教育委員会は、小湊フワガネク遺跡群の報告書『小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』を刊行した（高梨 2005a）。本報告で高梨は「小湊フワガネク遺跡群第一次・第二次調査出土土器の分類と編年」において小湊フワガネク遺跡群出土土器の考察と分析を行なっている。

#### （1）器種・容量

小湊フワガネク遺跡群出土土器の様相として、器形が甕形土器94%、壺形土器6%と報告。また、甕形土器の大半は胎土に大量の砂粒が含まれるが壺形土器には殆ど砂粒を含まないとし、この事から破片資料でも器形をある程度分類できるとしている。

兼久式土器において、胎土による器形の分類基準は本報告がはじめてである。これにより、胴部破片においても器形分析ができる可能性がある。また、甕形土器と壺形土器の胎土が相違する理由についても今後の課題である。

容量は甕形土器のみで行い、器形が比較的単純な形態を呈していることから、口径の大小と比例するとし口径サイズで分析を行なっている。分析の結果、小湊フワガネク遺跡群の甕形土器の口径は、15～20cmを標準サイズとし、5～10cm、10～15cmのサイズを小型、25～30cm、30～35cm、35～40cmのサイズを大型として報告している。分析結果から第一次調査土器と第二次調査土器を比較し、第一次調査出土土器は、標準～大型サイズの土器で構成され、第二次調査土器は、標準～小型土器で構成されるとし、調査地点における甕形土器構成の相違を指摘している。

兼久式土器において口径サイズによる分析は初めての試みであり、今後サイズ変化による食生活等の研究が行える可能性があり、同じ甕形土器でも容量の違いにより使用方法が相違する可能性もある。しかし、本報告では第一次調査と第二次調査の相違は報告されているが、各調査区において小型と大型に分かれるなど偏りは認められず、小湊フワガネク遺跡群の兼久式土器は、標準サイズを中心に存在するようである。今後は他遺跡出土土器の口径による分析も課題である。

#### （2）文様

文様は、①施文部分と②文様要素・文様意匠の2点を分析している。

①施文部分は、甕形土器を6箇所に分類。

	第一次調査文様有	第二次調査文様有
0 施文帯：口縁部内部	0点 0%	3点 1.6%か？
I 施文帯：口唇部	7点、21%	75点 42%
II 施文帯：口縁部外部	ほとんどの有文土器に施文有	

Ⅲ施文帯：隆	帯	26点 79%	117点 63%
Ⅳ施文帯：胴	部	4点 12%	55点 30%
Ⅴ施文帯：底	部	ほとんどの有文土器に施文有	

甕形土器底部外面には木葉痕を有しているが、壺形土器には底部外面にほとんど木葉痕が認められないことから、壺形土器の施文部分は、4箇所に分類。

	第一次調査文様有	第二次調査文様有
Ⅰ施文帯：口唇部	0点、0%	3点 25%
Ⅱ施文帯：口縁部外部	ほとんどの有文土器に施文有	
Ⅲ施文帯：隆	2点 100%	8点 67%
Ⅳ施文帯：胴	0点、0%	2点 17%

上記のように各施文帯の割合を報告している。

## ②文様要素・文様意匠

文様要素は、甕形土器・壺形土器ともに沈線文を中心に押引文・列点文・刻目文・隆帯文等を確認している。また、施文帯ごとの文様要素を報告し、文様意匠の割合も報告している。

### ○甕形土器

0施文帯：口縁部内部	沈線文
Ⅰ施文帯：口唇部	刻目文
Ⅱ施文帯：口縁部外部	沈線文を中心に押引文、列点文、隆帯文
Ⅲ施文帯：隆	隆帯文、刻目文
Ⅳ施文帯：胴	沈線文
Ⅴ施文帯：底	木葉痕

### ○壺形土器

Ⅰ施文帯：口唇部	刻目文
Ⅱ施文帯：口縁部外部	沈線文
Ⅲ施文帯：隆	隆帯文、刻目文
Ⅳ施文帯：胴	沈線文

文様意匠が認められる施文帯は、甕形土器・壺形土器共にⅡ施文帯とⅣ施文帯で、波状文・鋸歯文・幾何学文・半弧文・不明が認められ、その中でも、波状文・鋸歯文（同系統）が多数を占めている傾向があると報告されている。

## （3）器形

器形については、壺形土器は、全体の器形が窺える資料がほとんど認められないことから口縁部を中心に2器種に分類。甕形土器は、口縁部形態と口径・胴部最大径の関係、さらに器形・胴部最大径の関係も含めると12器種まで細分。しかし、破片資料では器形・胴部最大径の関係は区別が困難であると、有効な器種分類は6器種としている。

### ○甕形土器

口縁部形態	口径と胴部最大径の関係	器形・胴部最大径の関係
-------	-------------	-------------

- ①強く屈曲する口縁部:a類 ①口径が胴部最大径を上回る一群:I類 ①胴部最大径が胴部上半に位置  
 ②緩く屈曲する口縁部:b類 ②胴部最大径が口径を上回る一群:II類 ②胴部最大径が胴部下半に位置  
 ③屈曲しない口縁部:c類

	第一次調査	第二次調査	
I a 類	0 点、	2 0 点	
I b 類	7 点、	6 2 点	
I c 類	5 点、	1 0 点	※ I b 類・II b 類胴部最大径が口径を上回る 一群が圧倒的大勢と報告されている。
II a 類	4 点、	1 5 点	
II b 類	1 4 点、	6 9 点	
II c 類	3 点、	9 点	
○壺形土器			
		第一次調査文様有	第二次調査文様有
①口縁部が屈曲して立ち上がる一群：I 類		1 点、	1 2 点
②口縁部が屈曲しないで立ち上がる一群：II 類		1 点、	0 点

#### (4) 分類

##### ①文様の分類

調査外報発刊時点での甕形土器（有文土器）の分類に隆帯文の存在、施文部分、文様要素・文様意匠に注意しながら4類の大別、8類の細分を行っている。

第1類～沈線文のみが施された一群

第2類～刻目隆帯文が廻らされた一群

第2a類～刻目隆帯文の上部・下部に沈線文（隆帯文）が施されたもの

第2b類～刻目隆帯文の上部もしくは下部に沈線文（隆帯文）が施されたもの

第2b1類～刻目隆帯文の上部に沈線文（隆帯文）が施されたもの

第2b2類～刻目隆帯文の下部に沈線文（隆帯文）が施されたもの

第2c類～刻目隆帯文のみで沈線文が施されないもの

第3類～隆帯文が施された一群

第3a類～隆帯文のみが施されたもの

第3b類～隆帯文のほかに沈線文が施されたもの

第4類～無文の一群

##### ②分類の構成

	第一次調査	第二次調査
第1類	2 点	3 3 点
第2類	(2 7 点)	(1 1 7 点)
第2a類	4 点	3 9 点
第2b類	1 7 点	(6 8 点)
第2b1類	—	6 6 点
第2b2類	—	2 点

第2c類	6点	10点
第3類	1点	(9点)
第3a類	—	1点
第3b類	—	8点
第4類	4点	26点

Ⅱ施文帯の文様構成も第1類・第2a類・第2c類について若干の相違があると報告されている。また、第一次調査・第二次調査で出土しているイモガイ製貝札（広田遺跡上層型貝札）の文様構成も出土土器同様に若干の相違が認められるとしている。

口唇部（Ⅰ施文帯）における刻目施文においても、第一次調査出土土器と第二次調査出土土器で相違が認められ、第一次調査出土土器はⅠ施文帯の刻目施文が総じて少ないと指摘されている。なお、第二次調査出土土器を厳密に区別することはできないが、第一次調査・第二次調査上層の接合資料から、第一次調査・第二次調査上層が同一時間を共有しているとし、第二次調査下層出土土器と第一次調査・第二次調査上層出土土器には第1類・第2a類の有無の違い（短期間の時間差）を指摘している。

また、小湊フワガネク遺跡群以外の奄美群島の10遺跡についても確認再分類し、小湊フワガネク遺跡群において分類した分類案で対応できなかった、胴部上半に刻目隆帯文が廻らされた土器群を含めた、兼久式土器全体を網羅する文様分類案（5類の大別、9類の細分）を作成している。

第1類～沈線文のみが施された一群

第2類～刻目隆帯文が廻らされた一群

第2a類～刻目隆帯文の上部・下部に沈線文（隆帯文）が施されたもの

第2b類～刻目隆帯文の上部もしくは下部に沈線文（隆帯文）が施されたもの

第2b1類～刻目隆帯文の上部に沈線文（隆帯文）が施されたもの

第2b2類～刻目隆帯文の下部に沈線文（隆帯文）が施されたもの

第2c類～刻目隆帯文のみで沈線文が施されないもの

第3類～胴部上半に刻目隆帯文が廻らされた一群

第4類～隆帯文が施された一群

第4a類～隆帯文のみが施されたもの

第4b類～隆帯文のほかに沈線文が施されたもの

第5類～無文の一群

高梨は、ここで作成した文様分類を元に、共伴遺物・出土層位・型式学的変化を考察、兼久式土器の年代理解を大凡100年単位としながら、編年を行っている。

### I期（6世紀後半～7世紀前半）

兼久式土器の最古段階。7世紀前半にほとんどおさまると考えられ、7世紀を遡らないとしている。小湊フワガネク遺跡群第二次調査下層出土土器・小湊フワガネク遺跡群第二次調査上層出土土器・小湊フワガネク遺跡群第一次調査出土土器・土盛マツノト遺跡下層出土土器・喜瀬サウチ遺跡第2地点Gトレンチ出土土器が該当。また、小湊フワガネク遺跡群第二次調査下層出土土器をI期古段階、小

湊フワガネク遺跡群第一次調査上層出土土器をⅠ期新段階の標本資料になるとしている。新段階の土器群は、土師器長胴甕を共伴する。

## Ⅱ期（7世紀後半～8世紀前半）

第1類土器及びⅠ施文帯が消失する段階である。用見崎遺跡出土土器・面縄第一貝塚出土土器が該当する。用見崎遺跡出土土器がⅡ期の標本資料とされている。

## Ⅲ期（8世紀後半～9世紀前半）

第2a類が消失する段階である。赤尾木手広遺跡第3層出土土器・先山遺跡11トレンチ出土土器が該当する。

## Ⅳ期（9世紀後半～10世紀前半）

第2b類がほとんど消失して、新たに第3類が出現する段階。土師器丸底甕を共伴する。土盛マツノト遺跡上層出土土器・長浜金久遺跡第19層出土土器が該当する。

## Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前半）

判然としないが、第2c類が消失する段階であると考えられる。万屋泉川遺跡出土土器・万屋下山田遺跡出土土器が該当するとされ、類須恵器（カムイヤキ）が出現する直前段階に相当する。ただし、万屋下山田遺跡出土土器は類須恵器との共伴関係が認められるので、最新段階に位置付けられる可能性がある。

以上、小湊フワガネク遺跡群Ⅰの分類・編年を確認してみた。これまでの兼久式土器研究が単独遺跡のみで分析を行っていたが、小湊フワガネク遺跡群では、他の10遺跡も含めた検討行っており、編年も検討していることを考えると注目される報告である。

●2005年、高梨修は、『ヤコウガイの考古学』において、兼久式土器の分類と編年を行っている。奄美諸島の土器編年やヤコウガイ交易など注目される報告がなされているが、兼久式土器については、『小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』の報告と同様である（高梨2005b）。

●2006年、笠利町教育委員会は、マツノト遺跡の報告書『マツノト遺跡』を刊行した（中山2006a）。マツノト遺跡出土土器を5類に分類し、それぞれに対し細分類を行っている。

### （1）1類土器

貼付突帯文を有する土器群を1類土器と分類している。いわゆる河口が定義した兼久式土器のことを指していると考えられる。

#### ・1類土器の型式分類（type）

##### A類～横貼付突帯文

- Aエa～横突帯に刻目あり、沈線を上に施す
- Aエb～横突帯に刻目あり、沈線を下に施す
- Aエc～横突帯に刻目あり、沈線を上下に施す
- Aエd～横突帯に刻目あり、沈線なし
- Aオa～横突帯に刻目なし、沈線を上に施す
- Aオb～横突帯に刻目なし、沈線を下に施す
- Aオc～横突帯に刻目なし、沈線を上下に施す

Aオd～横突帯に刻目なし、沈線なし

B類～縦横斜貼付突帯文を有する

Bエa～縦横斜突帯に刻目あり、沈線を上に施す

Bエb～縦横斜突帯に刻目あり、沈線を下に施す

Bエc～縦横斜突帯に刻目あり、沈線を上下に施す

Bエd～縦横斜突帯に刻目あり、沈線なし

Bオa～縦横斜突帯に刻目なし、沈線を上に施す

Bオb～縦横斜突帯に刻目なし、沈線を下に施す

Bオc～縦横斜突帯に刻目なし、沈線を上下に施す

Bオd～縦横斜突帯に刻目なし、沈線なし

C類～無文土器

C1～口縁部直口

C2～口縁部外反

・底部の分類

底部タイプは器形から平底、くびれ平底、丸み平底の3タイプに分類。

(2) 2類土器

2類土器は、兼久式土器の定義から外れる在地土器群のことをさす。施文箇所は、そのほとんどが口縁部外面である。器種は甕と壺がある。甕は、胴が張り、口縁部が外反するものと最大径が口縁部にあり、いわゆる砲弾状の胴部形態を呈するものがある。文様の施文方法により3つに大別を行っている。

・沈線文

直線的に施文するものや曲線的に施文するものがある。内面にも沈線が施されている。ほとんどが第1文化層出土であるが、第2文化層出土のものもある。

・貼付文

縦方向や横方向へ直線的に粘土紐を貼り付けるものや弧状や鍵状に粘土紐を貼り付けるものがある。また、粘土紐に刻み目が施されているものもある。第1文化層出土のものがほとんどである。

・刺突文

半裁竹管状の施文具で押し引くように施文しているものをさし、施文方向が横位と縦位がある。その他に沈線文と貼付文を組み合わせているものもある。2類土器の中で出土する割合はもっとも低い。

(3) 3類土器

3類土器は、外来土器と外来系土器（模倣土器）である。弥生時代から古墳時代に対応すると考えられるものを先史時代の土器、奈良時代以降のものを歴史時代の土器として報告。

(4) 4類土器

4類土器は、系統関係不明の特殊なものである。注口土器と四足土器の底部がこの分類にあたる。

(5) 5類土器

5類土器は、島外産の須恵器である。



## ○出土土器の分析

・胎土による形式分類を行っている。胎土分類も行っており、甕は砂質 91%・泥質 9%を呈し、壺は砂質 13%・泥質 87%であり甕と壺の胎土は明らかに違うことを示している。

## ○マツノト遺跡の兼久式土器の特徴

マツノト遺跡出土の兼久式土器分類は下記のような特徴を示していると報告されている。

1. 一条の貼付突帯文をめぐらす特徴は 91%を示している。
2. 1 の一条貼付突帯文は 90%が刻目を有している。
3. 全体化（刻目有り、無しを含める）の突帯文と沈線の組み合わせについては沈線あり 65 点 41% 沈線無し 94 点 54%を呈し、沈線無しが多い。
4. 刻目突帯文を有する土器でも刻目突帯文+沈線は 59 点 43%、刻目突帯文だけで沈線を有さないものは 78 点 57%を示しており、3 と同様に沈線を有さないものが多いことがわかる（第 15 表マツノト遺跡出土土器層位別分析表）。
5. 層位的には兼久式土器を示す土器の大半が圧倒的に第 1 文化層に集中し一括資料を示していることがわかる。
6. 甕形土器と壺形土器の比率は甕形 75%、壺形 25%で甕形が多くを占めている。
7. 無文土器も 1, 2, 3 類全体の 20%を占めており、兼久式土器と共伴関係を示している。
8. 無文土器以外にも沈線文土器、外耳土器、弧状突帯文土器など 2 類に含めた土器も第 25 表口縁部 1, 2, 3 類層位別分類表が示すように第 1 文化層からの出土がある。
9. 底部の特徴は基本的に平底、くびれ平底、丸身平底をなす 3 タイプに分類される。
10. 底部は胎土分類から砂質は平底、くびれ平底の甕形土器を示し、丸身平底は壺形土器を示すパーセントが圧倒的である。

以上の特徴から型式分類は層位的時間差をあらわす資料が少なく、層位的検証で A 類は横突帯刻目有沈線上（Aエ a）と横突帯刻目有沈線無（Aエ d）が白砂層下から出土していることがわかる。B 類は縦横突帯刻目有沈線上（Bエ a）と縦横斜突帯刻目有沈線無（Bエ a）が白砂層から始まっている。C 類無文土器等が白砂層下、白砂層から出土しており、全体的にわずかであるが兼久式土器の時間差を示している。

ただし、A 類・B 類の 2 系統が同様に並行し共存しており、A 類・B 類・C 類ともにセット関係で捉えることが出来るとしている。

また、マツノト遺跡の土器は型式概念ではっきり編年を示すことが出来ないが、単独遺跡から 2 系統の組列をあて他遺跡から出土する兼久式タイプ（マツノト A B C）との対比によって編年が可能であるとしている。

●2006 年、中村友昭は「奄美諸島の古墳時代併行期の土器」をまとめている（中村 2006）。ここで、中村はマツノト遺跡出土土器設定分類（特にⅡ類土器）により検討を行っている。中村は、河口定義の頸部に断面三角形の突帯文やそれに刻み目を施したものを 1 条めぐらすという定義により兼久式土器を分析している。

Ⅱ類土器を対象に、文様と形態における 3 種類の分類観念で土器を分類し、この基準を、層位関係

の明らかな奄美群島内の5遺跡に適応して分析し、比較検討を行なっている。

#### ○分類案

マツノト遺跡出土の土器を対象として、文様、形態の二つの分類基準を設けている。前者については文様の有無と施文方法の2レベルで分類し（分類1）、後者では甕上半部（分類2）と底部（分類3）についてそれぞれに分類を行っている。

##### ・分類1：文様による分類

分類基準①：文様の有無により2分（有文・無文）。

分類基準②：口縁部における文様の施文箇所により分類（口縁部内面・口唇部・口縁部外面）。

分類基準③：施文方法によって命名した主文様で分類（沈線文・刺突文・貼付文）。

分類基準④：文様の内容により分類（直線文・曲線文）。

##### ・分類2：甕上半部形態により分類

甕上半部の屈曲の有無によって、i類とii類に分類（それぞれに複数の形状を含むが、一括）。

i類：屈曲するもの

①口縁部が大きく外反するもの

②胴部が張り出し最大径を胴部に測るもの

③口縁部が大きく外反し、胴部も張り出すもの

ii類：屈曲しないもの

①口縁部と胴部の径が同等なもの

②最大径が口縁部にあたり、底部に向かって徐々にすぼまるもの

##### ・分類3：底部形態による分類

ア類：丸底    イ類：脚台    ウ類：平底    エ類：くびれ平底

●2006年、中山清美は「兼久式土器分類試論 - 奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に -」をまとめている（中山2006b）。中山は、マツノト遺跡の分析を元に、泉川遺跡、用見崎遺跡、長浜金久I遺跡、フワガネク遺跡、安良川遺跡の比較検討を行っている。

遺跡間の比較により、中山は、フワガネクと泉川は、対極に位置しているとしている。また、施文位置（フワガネク→マツノト→用見崎→安良川→長浜兼久I→泉川）以外は、フワガネク→用見崎→安良川→長浜金久I→マツノト→泉川の序列となっていることを確認している。

検討内容を下記の4点にまとめている。

1. 兼久式土器は、甕・壺・鉢が組み合う一つの様式をなしている。甕と壺は3：1の比で存在するが鉢は希少である。
2. 甕・鉢と壺は、その胎土を意識的に使い分けて作られている。甕・鉢は砂質、壺は泥質の胎土が多い。
3. 兼久式土器は、刻目突帯を持つことを第一の特徴とするが、突帯に刻目をもたないものも少数存在し、今回はこれも兼久式に含めた。兼久式土器の文様は沈線文を主体とするが、これを欠くものも相当数ある。文様は突帯の上に施すものと、上下または下に施すものがあい半ばしている。
4. 兼久式土器を、突帯の位置、突帯の刻目の有無、沈線の有無、沈線の施文位置について分析し、

遺跡ごとに比較して、早晩の序列化を試みた。

●2007 年、高梨修は「南島の歴史的段階」をまとめている（高梨 2007）。ヤコウガイ大量出土遺跡・城久遺跡群・カムィヤキ古窯跡群・螺鈿・琉球螺鈿等を検討し、古代～中世並行期の奄美諸島史と遺跡動態をまとめている。兼久式土器の編年作業を行っているが、小湊フワガネク遺跡群の分類・編年と同様である。

●2008 年、中山清美は「マツノト遺跡における兼久式土器の編年基準」をまとめている（中山 2008）。中山は、マツノト遺跡の概要説明を行いながら、高梨編年・中村編年と比較検討を行い、甕のタイプ別に変化の傾向をまとめマツノト遺跡における兼久式土器編年を行っている。

●2008 年、名島弥生・安斎英介・宮城弘樹は、琉球列島においてこれまでに報告されてきた放射性炭素年代値を集成し報告している。放射性炭素年代値を奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島で集成を行っており、編年作業の指標として重要な報告である（名島・安斎・宮城 2008）。

●2009 年、鹿児島県立埋蔵文化財センターは 2007（平成 19）年に調査を行った『屋鈍遺跡』をまとめている。弥生から兼久式土器を出土する遺跡で、いわゆる 2 つの文化層に分けられている。第 2 文化層が兼久式段階と考えられる（西園 2009）。

報告書では、甕形土器の口縁部形態により 3 類に分類している。

I 類：開きながら立ち上がる胴部が口縁部付近で内傾し、口縁部がくの字状を呈するもの。

II 類：開きながら立ち上がる胴部が公園付近で内傾し、口縁部が緩やかなくの字状を呈するもの。

III 類：開きながら立ち上がる胴部が口縁部付近で内傾し、口縁部が緩やかな S 字状を呈するもの。

屋鈍遺跡では、層序的に 2 つの文化層に分けられることから、今後特にスセン当式土器の検討を行う際には重要な遺跡と考えられる。

●2010 年、伊仙町教育委員会が『川嶺辻遺跡の緊急調査』をまとめている（新里・宮城 2010）<sup>3)</sup>。川嶺辻では、土器集中区及び土器廃棄土坑より木葉痕を有する土器が確認されている。しかし、これらの土器は、刺突文により文様を表現している甕形土器やイボ状の突起が貼付されている土器などが報告され、今までの兼久式土器とは相違する。

宮城は、川嶺辻遺跡の土器を高梨編年の最新とされる V 期段階もしくはそれ以降とし、フェンサ下層式段階に並行するとしている。また、くびれ平底系土器を 3 期に分け報告している。

○初期型式：沈線文で文様を構成する中山のマツノト式、高梨の兼久式 I 期の初期兼久式からと、大当原式の文様の影響下にあるアカジャンガー式古段階がある。

○典型的な型式：新相のアカジャンガー式が刻目突帯文を特徴とするいわゆる典型的な兼久式が並行すると目される。

○刻目突帯文が消失し、突帯文や浅い刺突文や沈線文で区画文のみの文様構成となる川嶺辻に代表される土器群と沖縄の既知のフェンサ下層式。

また、川嶺辻遺跡では、放射性炭素年代測定により 10 世紀前後のデータが得られている。

以上、2000 年以降の兼久式土器研究及び報告を羅列してみた。2000 年までの研究状況と比較すると特に 2005 年以降に重要な研究及び報告がなされていることが確認できた。分類研究も格段に進歩

しており文様分析・分類のみでなく、器形分析・分類、属性分析・分類も検討されている。また、各研究者により兼久式土器の編年研究も次々に行われ、徐々に兼久式土器の実体が明らかになりつつある。しかし、研究者間における見解は相違している。

### 3 兼久式土器の抱えている問題点

兼久式土器に関する報告書・論文を年代順に羅列し研究略史を整理した。重要な遺跡の報告、優れた研究が次々に発表されているが、兼久式土器は未だに数多くの問題を抱えていることが確認できた。そこで、兼久式土器編年研究が抱えている問題点の抽出を行ないたい。

- (1) 兼久式土器の定義として、河口貞徳氏が兼久式土器の特徴を提示して以降、兼久式土器の定義付けらしきものはほとんどなされていない。今日では、河口氏が提示した兼久式土器の特徴にあてはまらない土器も出土し、兼久式土器の実態が未だに把握されていないことがわかる。このことは中山清美氏が「どこまでが兼久式土器なのかの判断は各調査者にまかされていよう。」(中山 1984) と提示し、高梨修氏が「いわゆる兼久式土器は難解なる土器として受け止められている。兼久式土器の実態が曖昧模糊としており、定義が判然としていないからである。」(高梨 1999a) と提示しているように兼久式土器の実態・定義が判然としていないのが現状である。また、各研究者により河口定義の中心とする属性が相違しており、定義付けが必要である。
- (2) 各遺跡・研究者で分類が作成されていて、兼久式土器全体を総括する分類が無い。また、分類・分析の相対的比較が行なわれているが、未だ見解の一致を見るには至っていない。このことは兼久式土器の実態が判然としない原因の一つである。
- (3) 兼久式土器の実体が判然としないため、種子・屋久地域(トカラ地域)及び沖縄諸島との比較検討が行えない状況である。

兼久式土器には、問題点が多数認められるが、編年研究において特に問題であると考えられるのが上記の3点であると考えられる。そこで本稿では、平成12年度にまとめた奄美における兼久式土器の基礎的研究で設定した分類案を再度検討したい。

まず、前回の分類案であるが、甕形土器の文様分類案である。これは、壺形土器についても大凡同じ分類が可能であると考えられる。

2000年以降の兼久式土器の研究において各属性や器形についても分析・分類が行われているが、分類の中心になる属性は文様であり、編年研究も文様帯による研究が中心であり、前回作成した分類案の使用が可能であると考えられる。よって、今回は前回の分類案に新たに確認された情報を追加し分類案の再整理を行いたい。

### 4 平成12年度作成の兼久式土器分類案

前回、兼久式土器の分類を作成する上で、小湊フワガネク遺跡群から出土した兼久式土器105点を使用した。検討対象資料として兼久式土器の甕形土器口縁部のみを対象とした。検討対象資料の選出は沈線文のみの土器は発見できうるすべての資料を対象とし(27点)、他の資料は残存状態が良好な破片を任意に取り出して実測を行なった。実測に際しては、文様に重点を置き、器面調整に関しては

除外した。また、文様に重点を置いているため実測図は土器破片を復元器形の中央に配置し、大半は土器外面のみを実測することにした。個体における文様の施文位置については、内面を1文様帯、口唇部を2文様帯、口唇部から横位方向隆帯文までを3文様帯、横位方向隆帯文上を4文様帯、横位方向隆帯文以下の胴部を5文様帯とし、文様帯を区分する。

他遺跡の資料については、報告書に掲載された図面をそのまま使用することとした。その際の選出方法は、原則として口径が復元できるものを選出した。検討対象資料は、万屋・泉川遺跡10点、和野・長浜金久遺跡38点、用・ミサキ遺跡36点、各遺跡の出土土器の分析方法是小湊フワガネク遺跡群で行なう方法と同じ方法である。

●奄美における兼久式土器の基礎的研究～小湊・フワガネク遺跡を中心に～で作成した分類案

○文様の有無により、無文土器をⅠ類、有文土器をⅡ類とする。

- ・Ⅰ類…無文土器
- ・Ⅱ類…有文土器

○Ⅱ類土器はさらに隆帯文の有無により、沈線文のみの土器（Ⅱ－A類）と隆帯文を施す土器（Ⅱ－B類）に分けることが可能である。

- ・Ⅱ－A類…沈線文のみの土器
- ・Ⅱ－B類…隆帯文を施す土器

○Ⅱ－B類はさらに口縁部近くに横位方向隆帯文を施すか施さないかにより、口縁部近くに横位方向隆帯文を一条巡らせる土器（Ⅱ－B－a類）と口縁部近くに横位方向隆帯文を巡らせない土器（Ⅱ－B－b類）に分けることが可能である。

- ・Ⅱ－B－a類…口縁部近くに横位方向隆帯文を一条巡らせる土器
- ・Ⅱ－B－b類…口縁部近くに横位方向隆帯文を巡らせない土器

○Ⅱ－B－b類は隆帯文の形状により、縦位方向隆帯文を口縁部に施す土器（Ⅱ－B－b－ $\alpha$ 類）と耳状隆帯文を口縁部に施す土器（Ⅱ－B－b－ $\beta$ 類）に分けることが可能である。

- ・Ⅱ－B－b－ $\alpha$ 類…縦位方向隆帯文を口縁部に施す土器
- ・Ⅱ－B－b－ $\beta$ 類…耳状隆帯文を口縁部に施す土器

○Ⅱ－B－b－ $\alpha$ 類は、口縁部に縦位方向隆帯文のみを施す土器（Ⅱ－B－b－ $\alpha$ －1類）と口縁部に縦位方向隆帯文と沈線文を施す土器（Ⅱ－B－b－ $\alpha$ －2類）に分けることが可能である。

- ・Ⅱ－B－b－ $\alpha$ －1類…口縁部に縦位方向隆帯文のみを施す土器
- ・Ⅱ－B－b－ $\alpha$ －2類…口縁部に縦位方向隆帯文と沈線文を施す土器

○Ⅱ－B－b－ $\beta$ 類は、口縁部に耳状隆帯文のみを施す土器（Ⅱ－B－b－ $\beta$ －1類）と口縁部に耳状隆帯文と沈線文を施す土器（Ⅱ－B－b－ $\beta$ －2類）に分けることが可能である。

- ・Ⅱ－B－b－ $\beta$ －1類…口縁部に耳状隆帯文のみを施す土器
- ・Ⅱ－B－b－ $\beta$ －2類…口縁部に耳状隆帯文と沈線文を施す土器

○Ⅱ－B－a類は、隆帯文と沈線文の組合せにより、口縁部に隆帯文のみを施す土器（Ⅱ－B－a－1類）と口縁部に隆帯文と沈線文を施す土器（Ⅱ－B－a－2類）に分けることが可能である。

- ・Ⅱ－B－a－1類…口縁部に横位方向隆帯文のみを施す土器

- ・Ⅱ-B-a-2 類…口縁部に隆帯文と沈線文を施す土器
  - Ⅱ-B-a-1 類には、縦位方向隆帯文を伴う土器も存在する。よって、Ⅱ-B-a-1 類は縦位方向隆帯文の有無により、縦位方向隆帯文を施す土器（Ⅱ-B-a-1-イ類）と縦位方向隆帯文を施さない土器（Ⅱ-B-a-1-ロ類）に分けることが可能である。
    - ・Ⅱ-B-a-1-イ類…Ⅱ-B-a-1 類に縦位方向隆帯文を施す土器
    - ・Ⅱ-B-a-1-ロ類…Ⅱ-B-a-1 類に縦位方向隆帯文を施さない土器
  - Ⅱ-B-a-2 類は、沈線文の施文位置により、横位方向隆帯文の上部のみに沈線文を施す（3 文様帯のみ）土器（Ⅱ-B-a-2-①類）と横位方向隆帯文の上下部分に沈線文を施す（3・5 文様帯）土器（Ⅱ-B-a-2-②類）に分けることが可能である。
    - ・Ⅱ-B-a-2-①類…横位方向隆帯文の上部のみに沈線文を施す土器
    - ・Ⅱ-B-a-2-②類…横位方向隆帯文の上下部に沈線文を施す土器
  - Ⅱ-B-a-2-①類には、縦位方向隆帯文を伴う土器が存在する。よって、縦位方向隆帯文の有無により、縦位方向隆帯文を施す土器（Ⅱ-B-a-2-①-イ類）と縦位方向隆帯文を施さない土器（Ⅱ-B-a-2-①-ロ類）に分けることが可能である。
    - ・Ⅱ-B-a-2-①-イ類…Ⅱ-B-a-2-①類に縦位方向隆帯文を施す土器
    - ・Ⅱ-B-a-2-①-ロ類…Ⅱ-B-a-2-①類に縦位方向隆帯文を施さない土器
  - Ⅱ-B-a-2-②類には、縦位方向隆帯文を伴う土器が存在する。よって、縦位方向隆帯文の有無により、縦位方向隆帯文を伴う土器（Ⅱ-B-a-2-②-イ類）と縦位方向隆帯文を施さない土器（Ⅱ-B-a-2-②-ロ類）に分けることが可能である。
    - ・Ⅱ-B-a-2-②-イ類…Ⅱ-B-a-2-②類に縦位方向隆帯文を施す土器
    - ・Ⅱ-B-a-2-②-ロ類…Ⅱ-B-a-2-②類に縦位方向隆帯文を施さない土器
- 以上が、小湊フワガネク遺跡群出土土器を中心に、作成した分類案である。

兼久式土器の文様は、沈線文・隆帯文で構成されることから、文様の組合せと施文部位により分類を行い、細分に関しては、口縁部近くの横位方向隆帯文に重点をおいて分類を行なった。その結果から文様分類案を作成した。しかし、この分類にあてはまらない兼久式土器が他の遺跡において確認できた。以下に列記してみることにする。

- ①刻目隆帯文の貼り付け位置が胴部に下がる土器
- ②横位隆帯文＋縦位方向隆帯文と横位隆帯文が変化した土器
- ③横位粘土帯＋縦位粘土帯＋沈線文の土器（沈線文の施文の仕方・文様、粘土帯の雰囲気の違いから、Ⅱ-B-a-2-②-ロ類とは別の分類であると推測される土器）。

上記の3点が小湊フワガネク遺跡群で作成した文様分類案にあてはまらない土器である。この3点の土器は下記の基準により、新たに分類項目を設定し小湊フワガネク遺跡群の文様分類案に含めてみたい。

- ①・②の土器は、Ⅱ-B-a-1-ロ類の横位方向隆帯文が移動、または、変化したものと推測できる。よって、横位方向隆帯文の位置の変化により、新たに以下のように分類する。
  - ・口縁部に横位方向隆帯文が貼り付けられる土器をⅡ-B-a-1-ローあ類とする。

・横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられる土器をⅡ-B-a-1-ローい類とする。

Ⅱ-B-a-1-ローあ類・Ⅱ-B-a-1-ローい類、それぞれの横位方向隆帯文が変化したものではないものに細分できることから、横位方向隆帯文が変化しないものを(a)、横位方向隆帯文が変化したものを(b)とすると、新たな分類設定は以下のようになる。

Ⅱ-B-a-1-ローあ-(a)類 ・口縁部に横位方向隆帯文が貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化しないもの

Ⅱ-B-a-1-ローあ-(b)類 ・口縁部に横位方向隆帯文が貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化するもの

Ⅱ-B-a-1-ローい-(a)類 ・横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化しないもの

Ⅱ-B-a-1-ローい-(b)類 ・横位方向隆帯文が胴部に貼り付けられ、横位方向隆帯文が変化するもの

これらの土器群は、小湊フワガネク遺跡群の文様分類のⅡ-B-a-1類の系統に位置付けられると推測される。よって、文様分類案に新たに加えることにする。

なお、③の土器について、今回の文様分類基準においてはⅡ-B-a-2-②-イ類に含まれることになるが、③の土器の特徴として、沈線文を数本単位で櫛状に施文し、隆帯文により文様を施す。この特徴は、Ⅱ-B-a-2-②-イ類の土器とは明らかに違うため、Ⅱ-B-a-2-①-イ類に含めるのは保留したい。そのためこの土器は、文様分類では不明とする。

以上の細分類により、小湊フワガネク遺跡群出土土器で確認されていない土器群を含めて文様分類を設定した。

平成12年琉球大学の修士論文にて作成した分類案は、上記の通りである。数字・アルファベット等記号偏重分類は9年が経過した現在、分類基準は覚えていても、各分類がどの土器を対象としているかという内容については表を確認しないと認識できない。そこで、他研究者の編年作業に使用した分類と比較を行い、分類案の再整理を行いたい。

近年の兼久式土器の編年研究は、文様(沈線文・隆帯文・刻目隆帯文)と文様帯(施文位置)に重視をおいた研究が主である。特に刻目隆帯文に重心をおいた分析が多く、その変化の方向性は、簡易化という方向性が示されている。

そこで、兼久式土器文様分類を文様帯(施文位置)に重点を置き、下記のように再整理を行いたい(図1、表1)。

第1類：施文帯1・2・3・5に文様を施す土器

(沈線文のみの土器)

第2類：施文帯2・3・4・5に文様を施す土器

(口縁部隆帯文(区画文)の上下に沈線文(隆帯文)を施した土器)

第3類：施文帯2・3・4に文様を施す土器

（口縁部隆帯文（区画文）の上部若しくは下部に沈線文（隆帯文）を施した土器）

第4類：施文帯4に文様を施す土器

（口縁部隆帯文（区画文）のみを施した土器）

第5類：施文帯5に文様を施す土器

（隆帯文（区画文）が胴部に施された土器）

第6類：施文帯3に文様を施す土器

（刺突文・押引文等を施すが隆帯文を持たない土器）

第7類：文様を施さない土器

（無文土器）

※ここでの隆帯文は、刻目の有無、縦横斜位・耳状の隆帯文も含む。

以上の7類に文様分類案を再整理してみた。また、先行研究から兼久式土器の文様は簡素化していく方向性が示されているので、第1類→第5・6類への変化が推測される。ただし、これらの土器群は基本的には同時に存在すると考えられるため、今後の検証が必要である。

また、川嶺辻遺跡で出土した刺突文で施文を行う土器は、従来の分類では「沈線文のみの土器」に分類されてしまうが、これは文様の簡素化による隆帯文の消滅と考えるのが妥当であると考えられ、第6類として新たに設定してみた。なお、面縄第1貝塚や加計呂麻島須子茂集落遺跡出土品・与路集落出土品などにおいて、いわゆる兼久式土器の特徴である（刻目）隆帯文が施文される位置に刻目及び押引文を施す事例がある。これらの土器も従来の分類では「沈線文のみの土器」に分類されてしまうが、隆帯文を区画文と捉えると隆帯文の変化として沈線文を施すことも推測される。これらの土器は、奄美大島南部・徳之島に少量ながら確認できる。これは、沖縄のアカジャンガーやフェンサとの関連も考えられ、今後の検討課題である。

## 謝辞

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表、茨城大学・青山和夫）研究項目 A04「琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究」（代表、高宮広土 21101005）の助成を受けたものである。

〈英文〉This study was partly supported by Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas (grant no. 21101005. Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan (or MEXT)).



## 注

- 1) 国土交通省国土地理院及び海上保安庁が協議し、地名統一を図る会議「地名等の統一に関する連絡協議会」において、平成 22 (2010) 年 2 月 15 日に「奄美群島」の呼称に統一する事が決定されたため、これまでに使用していた「奄美諸島」より「奄美群島」への変更を行った。
- 2) 平成 12 年度の琉球大学修士論文で筆者がまとめた論文であるが、平成 17 (2005) 年の小湊フワガネク遺跡群の正式報告を待って、平成 20 (2008) 年に瀬戸内町立図書館・郷土館紀要にて正式発表を行った。
- 3) 川嶺辻遺跡の調査報告資料は、報告書作成中にも関わらず、伊仙町教育委員会 新里亮人氏のご好意により資料の実見の機会を頂き、本稿での使用の許可をいただいた。

## 引用・参考文献

- 池畑耕一 1984 『あやまる第 2 貝塚―笠利町文化財報告No.7―』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 牛ノ浜修・堂込秀人 1983 『面縄第 1. 第 2 貝塚』鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会
- 内山省吾 1983 『コピロ遺跡―研究室活動報告 15―』熊本大学文学部考古学研究室
- 大西智和 1997 「奄美諸島における兼久式土器分類のための基礎作業」『南日本文化』第 30 号  
鹿児島短期大学附属南日本文化研究所
- 小倉卓 1997 『用見崎遺跡Ⅳ―研究活動報告 33―』熊本大学文学部考古学研究室―
- 小畑弘己・辻満久 1981 『宇宿港遺跡―研究室活動報告―10』
- 鼎丈太郎 2001 「奄美における兼久式土器の基礎的研究～小湊・フワガネク（外金久）遺跡を中心  
(2008) に～」『瀬戸内町立図書館・郷土館紀要』第 3 号瀬戸内町立図書館・郷土館  
※平成 13 年 (2001) 琉球大学修士論文
- 河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の毎年について」『琉大史学』琉球大学史学会
- 河口貞徳 1978 『サウチ遺跡』笠利町教育委員会
- 河口貞徳 1996 「兼久式土器」『日本土器事典』
- 木下尚子 2003 『先史琉球の生業と交易 改訂版』熊本大学文学部
- 木下尚子 2006 『先史琉球の生業と交易 2』熊本大学文学部
- 新里亮人 2010 『川嶺辻遺跡』伊仙町教育委員会
- 高梨修 1993 「琉球弧・奄美諸島におけるいわゆる「兼久式土器」研究の基礎的方針」  
『法政考古学』第 20 集記念論集
- 高梨修 1995 『シンポジウムよみがえる古代の奄美』『マツノト遺跡出土の土器と編年』  
シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会
- 高梨修 1998 「名瀬市小湊・フワガネク（外金久）遺跡の発掘調査」  
『鹿児島県考古学会研究発表資料―平成 10 年度―』

- 高梨修 1999a 『第2回奄美博物館シンポジウムサンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流ーヤコウガイをめぐる考古学・歴史学ー』名瀬市教育委員会
- 高梨修 1999b 『奄美大島名瀬市 小湊・フワガネク（外金久）遺跡ー学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査概報ー』名瀬市教育委員会
- 高梨修 2000a 「ヤコウガイ交易の考古学ー奈良～平安時代並行期の奄美諸島、沖縄諸島における島嶼社会ー」『交流の考古学』朝倉書店
- 高梨修 2000b 「いわゆる兼久式土器と土盛マツノト遺跡出土土器の比較検討」『奄美博物館研究紀要』第5号名瀬市立奄美博物館
- 高梨修 2004 「奄美諸島の土器」『考古資料大観』第12巻小学館
- 高梨修 2005a 「小湊フワガネク遺跡群第一次・第二次調査出土土器の分類と編年」『小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』名瀬市教育委員会
- 高梨修 2005b 「第二章 兼久式土器の分類と編年」『ヤコウガイの考古学』同成社
- 高梨修 2007 「南島の歴史的段階 - 兼久式土器出土遺跡の再検討 - 」『東アジアの古代文化』
- 高宮廣衛 1990 『先史古代の沖縄』
- 立神次郎 1986 『泉川遺跡ー新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書ー』鹿児島県教育委員会
- 戸崎勝洋・長野真一 1987 『先山遺跡』鹿児島県大島郡喜界町教育委員会
- 中村友昭 2006 「奄美諸島の古墳時代併行期の土器」『先史琉球の生業と交易2』熊本大学文学部
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子・上村俊雄 1996 「奄美地域における弥生土器の型式学的検討」  
『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第44号別冊』
- 中山清美 1979 『手広遺跡 発掘調査終了報告ー龍郷町教育委員会』
- 中山清美 1983 「兼久式土器（Ⅰ）」『南島考古』8号
- 中山清美 1984 「兼久式土器（Ⅱ）」『南島考古』9号
- 中山清美 1988a 『下山田Ⅱ遺跡（東地区）』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 中山清美 1988b 「第四章 考古学上からみた龍郷町」『龍郷町誌 歴史編』  
龍郷町誌歴史編編纂委員会
- 中山清美 1992a 「奄美における貝符と兼久式土器」『奄美学術調査記念論文集』  
南日本文化研究所叢書18、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
- 中山清美 1992b 『マツノト遺跡発掘調査概報ー笠利町教育委員会』
- 中山清美 1995a 『シンポジウムよみがえる古代の奄美「マツノト遺跡の発掘調査」  
シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会』
- 中山清美 1995b 『用見崎遺跡ー長島植物園開発に伴う遺跡確認調査ー』笠利町教育委員会
- 中山清美 1996 「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』ー第4号ー奄美考古学会
- 中山清美 2000 「奄美考古学研究の現状」『古代文化』第52巻 第3号、古代学協会
- 中山清美 2005 『安良川遺跡』笠利町教育委員会
- 中山清美 2006a 『マツノト遺跡』笠利町教育委員会

- 中山清美 2006b 「兼久式土器分類試論 - 奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に - 」『先史琉球の生業と交易 2』熊本大学文学部
- 中山清美 2008 「マツノト遺跡における兼久式土器の編年基準」『南島考古』第 27 号
- 名島弥生・安斎英介・宮城弘樹 2008 「南西諸島の炭素 14 年代資料の集成」『南島考古』第 27 号
- 西園勝彦 2009 『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 藤江望 1996 『用見崎遺跡Ⅱ－研究活動報告 32－』熊本大学文学部考古学研究室
- 松原明美 1983 『辺留窪遺跡－研究室活動報告 15－』熊本大学文学部考古学研究室
- 美浦雄二 1995 『用見崎遺跡－研究活動報告 31－』熊本大学文学部考古学研究室
- 弥栄久志 1984 『長浜金久遺跡－新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』鹿児島県教育委員会
- 弥栄久志 1987 『長浜金久遺跡（第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ遺跡）』鹿児島県教育委員会
- 弥栄久志 1995 『長浜金久遺跡－新奄美空港に伴う埋蔵文化財報告書－』鹿児島県教育委員会
- 宮城弘樹 2010 「目手久川嶺辻遺跡第 5 遺構面出土土器の位置付け」『川嶺辻遺跡』

## 図版・表

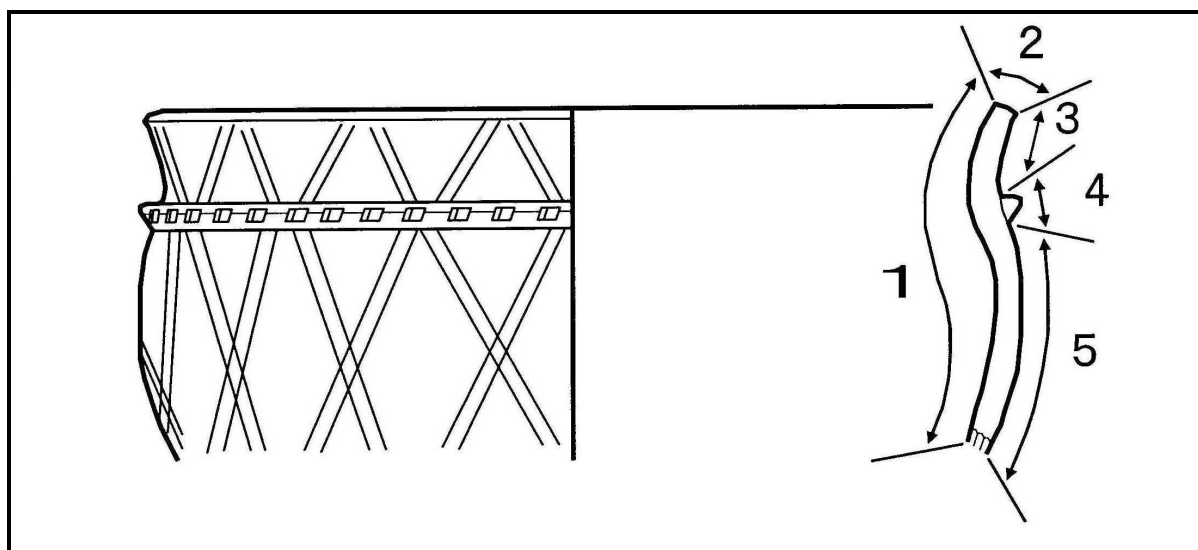


図 1 文様の施文位置（文様帯）

新分類案	分 類 基 準	文様帯(図1)					旧分類案	旧 分 類 基 準
		1	2	3	4	5		
第1類	施文帯1・2・3・5に文様を施す土器	△	△	○		○	Ⅱ-A類	沈線文のみの土器
第2類	施文帯2・3・4・5に文様を施す土器		△	○	○	○	Ⅱ-B-a-2-②類 Ⅱ-B-b-α-2類 Ⅱ-B-b-β-2類	口縁部隆帯文(区画文)の上下に沈線文(隆帯文)を施した土器
第3類	施文帯2・3・4に文様を施す土器		△	○	○		Ⅱ-B-a-2-①類	口縁部隆帯文(区画文)の上部若しくは下部に沈線文(隆帯文)を施した土器
第4類	施文帯4に文様を施す土器				○		Ⅱ-B-a-1-□-あ類 Ⅱ-B-a-1-イ類 Ⅱ-B-b-α-1類 Ⅱ-B-b-β-1類	口縁部隆帯文(区画文)のみを施した土器
第5類	施文帯5に文様を施す土器				○		Ⅱ-B-a-1-□-い類	隆帯文(区画文)が胴部に施された土器
第6類	施文帯3に文様を施す土器			○			なし	※旧分類時点では、確認されていない
第7類	文様を施さない土器						I 類	無文土器

表1 兼久式土器文様分類表

新分類案	旧分類案(鼎2001)	高梨分類(2005a)	中山分類(2006a)
第1類	Ⅱ-A類	第1類	2類土器(沈線文)
第2類	Ⅱ-B-a-2-②類 Ⅱ-B-b-α-2類 Ⅱ-B-b-β-2類	第2a類	AⅡc、A才c BⅡc、B才c
第3類	Ⅱ-B-a-2-①類	第2b類	AⅡa、AⅡb、A才a、A才b BⅡa、BⅡb、B才a、B才b
第4類	Ⅱ-B-a-1-□-あ類 Ⅱ-B-a-1-イ類 Ⅱ-B-b-α-1類 Ⅱ-B-b-β-1類	第2c類	AⅡd、A才d BⅡd、B才d
第5類	Ⅱ-B-a-1-□-い類	第3類	(AⅡd、A才d)
第6類	なし	なし	2類土器(刺突文)
第7類	I類	第5類	C類

表2 兼久式土器分類比較表